

第 24 期日本学術会議 健康・生活科学委員会 (第 3 回)

議事録

I 開催日時：2018 年 8 月 23 日(木) 11:00 ~12:10

II 場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 A 棟 2 階 A204 教室

III 出欠

出席：小川宣子、熊谷日登美、小松浩子、多久和典子、安村誠司

欠席者：秋葉澄伯、神谷研二、寶金清博、宮地元彦、田辺新一

片田範子(災害(台風)による欠席)

IV 議事：

1. 健康・生活科学委員会に関連する分科会の活動状況

①脱タバコ社会実現分科会：提言の発出をめざす。現在は、歯科関連に関する報告書作成に向けて専門家のヒアリングを実施している。併せて、加熱式タバコが出ている中でどのように禁煙を進めていくかについてヒアリングをすすめ、論点の方向性と提案について検討する。本テーマに関しては、リスク等について学習し、エビデンスを確認したうえで報告の予定。受動喫煙防止法が 2018 年 3 月に閣議決定され、オリンピック、パラリンピックが開催されることに鑑み、できるだけ早い時期に報告の予定である。

②高齢者の健康分科会：学際的な分野で多面的な専門家を含んでいる分科会である、活動の方向を決めていく上で、メンバーを追加(制度に関する専門家を含む)し、課題の抽出、焦点化をすすめている。

③パブリックヘルス科学分科会：多分野のメンバーが参加、専門分野の人材の育成について検討をすすめている。

④家政学分科会：家庭科教育と教員の育成に関する提言作成をめざす。幹事会での意見を受けて提言「生きる力の更なる充実を目指した家庭科教育への提案ーより効果的な家庭科教育の実現に向けてー」の修正をすすめている。10 月 27 日に公開シンポジウム「生活によりそう家政学」の開催を予定している。

⑤IUNS 分科会：IUNS (International Union of Nutritional Sciences)においては日本が中心的役割を担っており、本分科会は、その窓口になっている。2021 年(平成 33 年)に東京で開催される第 22 回 IUNS 国際栄養会議(ICN)の準備をすすめている。IUNS の分科会として発展途上国の若手のリーダー育成のためのワークショップ開催も積極的にすすめている。

⑥看護学分科会：地域共生社会形成をめざし、多分野連携に基づく看護学の貢献についてシンポジウムを開催し、「学術の動向」に公開した。引き続き、地元創成看護について検討をすすめる。高度実践看護の裁量権拡大に向けての検討をすすめるシンポジウムを開催した。引き続き議論、調査をすすめる。ケアサイエンスについては「少子高齢者社会におけるケアサイエンス分科会」を創設し、多分野のメンバーと広く検討をすすめることとなった。

・高度実践看護については社会の人々が認知しやすく、かつその効果が実感できるような名称や役割開発を果敢にすすめていけるとよい。

⑦少子高齢者社会におけるケアサイエンス分科会：「ケアサイエンス」について取り組むべき今日的課題を多面的に検討している。「ケアサイエンス」とは何かがわかりにくいいため、その人に潜在する可能性を引き出すケアについて実践知や研究例を検討し、ケアサイエンスを構成する要素や次元を導きだしていく。シンポジウムを実施し、多方面からの意見も集約しつつすすめる。

・ケアといっても広い。少子高齢者社会としての場合、障がい者へのケアは含まないと思う。また、ケアの特徴として学際的アプローチが想定されるが、その他に方法論としての特徴を明らかにしていく必要もある。

2. 健康・生活科学委員会の活動の方向性

・世界への貢献をめざす。ことに、少子高齢化がすすむこれからの日本社会にむけた貢献をめざす。キーワードは健康と生活。

・人々が普通に生きて、生を全うすることができる社会。そのために、高齢者予備軍に対する働きかけが重要。

・少子高齢化社会が進む中での健康と生活を育む学術貢献をすすめる。

・超高齢社会の根本的な解決には人口構造の修正が必要であり、高齢者と対局にある少子の問題解決には、例えば環境・生活習慣要因によって精子が減っていることなどの啓発も必要と考えられる（中国では激減、日本でも生活習慣で改善可能な精子減少/機能低下・無精子症の問題が取り上げられている）。健康・生活科学委員会のテーマとして検討する必要はないだろうか？

・少子の問題については、国主導の全国レベルの研究として、エコチル調査（H23年度より）10万人調査などが進められている（環境省による調査、妊よう性、発達障害（心身）、アレルギーなど、子どもの環境に関わる問題の調査 生まれてから12歳までコホートする。化学物質、ダスト、子と親の採血、暴露要因との関連）。

・健康と生活を科学する学問分野として大切にすべき点は何か？

個別性、多様性、価値観の多様、地域性 など

・健康と生活を探求する上で、共通性と多様性中で個別性を守ることを忘れないように。

・一人ひとり違う生活や生き方、価値観や生きがいについてサイエンスはどのように対応できているのか？ について検討することが求められる。

・ケアサイエンス分科会で取り組んでいるように、経験主義的に、よいといわれるものを科学として評価していくというアプローチもあるだろう。

今回の委員会は少人数で意見交換を行い、検討課題を深めていくことができると感じた。今後の委員会においてもグループ討議をすすめ、前述の論議の中から具体的な検討課題を焦

点化していけるとよい。

以上、文責 小松